論文内容の要約

学生番号	3214003
氏　　名	大田　康江

主　査	村中　陽子教授
副　査	上野　恭子教授
副　査	髙橋　眞理教授

学位論文名	「産褥早期母児愛着形成支援」のための看護職トレーニングプログラムの介入効果
訳タイトル	Evaluation of a training programme for nurses and midwives to facilitate mother-infant bonding in the early postpartum period
共　著　者	

論文内容の要約（1,000 字～1,500 字）

【目的】産褥早期における良好な母子関係の構築を支援するアタッチャー（母児の愛着形成支援者）を目指し、産褥早期の母児ケアに従事している看護職を対象に、「産褥早期母児愛着形成支援」のための看護職トレーニングプログラムを開発、導入し、その効果について、授乳ケア場面における看護者の母児への関わりの変容を言語的、行動的、認知的側面から定量的かつ定性的に検証することである。

【方法】1. 研究デザイン：対照群をもたない一群の前後比較介入研究　**2. 対象：**産褥早期の母児ケアに携わる看護者 17 名 **3. 教育プログラムの開発：**Karl ら(2006)の attacher（母児の愛着形成支援者）としての看護者の関わり概念、筆者ら(2016)の母児愛着形成のための看護（アタッチャー）モデルおよび Fostaty ら(2000)の ICE モデルを基盤に開発した。1)看護者の母親との応答的・養育的・模範的関係性構築のためのスキル 2)授乳と児の睡眠が強く関連づけされることによって引き起こされる長期的弊害を理解し育児を支援できるスキル 3)新生児の発するサインや行動を正しく認識し適切に応答できるスキル 4)　1）2）3）で獲得した知識、スキルを統合し、臨床実践に活用、を目標とする約 3 時間の web 教材を作成した。教育プログラムは、Step1（知識編）Step2（知識続編）Step3（実践編）の 3 段階構成とした。Step1（知識編）は、米国の Janice(2008) が開発した HUG your baby の日本語版を開発者の使用許可を得て使用した。

4. 調査の手順：まず介入前として、授乳ケア 52 場面 において、母児に対する看護者の関わりおよび言動の参加観察を行った。その後、web ベースの教育プログラムによる介入を実施した。介入後は、再度看護者の関わり及び言動について授乳ケア 51 場面における参加観察を行った。なお参加観察中は IC レコーダーにて録音し、フィールドノーツにメモをとった。受講終了 1 か月後に、学習したスキルや知識に基づきケアした印象に残る 1 事例および今回の学習プロセスについて、Gibbs(1988)のリフレクションフレームワークを用いてリフレクション面接を実施した。面接中は IC レコーダーで録音した。**5. 分析方法：**母児に対する看護者の言語的関わり変化を修正版 RIAS (Roter Interaction Analysis System)を用いて、定量的に分析した。さらに参加観察ケア場面における看護者の関わりの変容を言語的・行動的側面から、定性的に事例分析した。リフレクションインタビューは、Braun(2006)のテーマ分析の手法に基づき分析した。

【結果・考察】研究参加者は、産褥早期の母児ケアに携わる看護者 17 名、平均経験年数は 7.11±4.7 年(1-17 年)の助産師であった。

介入前後における看護者の母児への言語的変化の定量的分析では、「相互作用促進」発話は、看護者、母親ともに有意に増加が認められた（t=-4.79, p=.00, t=-2.86, p=.01）。なお、看護者の発話は、＜児のサインのキャッチ・応答＞＜児のサインを母親に説明＞＜児をひとりの人間として話しかける＞すべての下位項目において有意な増加がみられ（t=－2.15～－6.02、p=0.05～0.00）、一方母親は＜母親がナースの児への応答に追従＞に有意な増加がしめされた(t=-4.16,p=.00)。

看護者の言動的変化における定性的分析では、介入後には、17 名中 13 名の看護者においては、児の行動に意識が向き、児を一人の人間として捉え、児のサインをキャッチし、適切に応答できる児への応答性が高められていた。さらに看護者の児への応答性が高まると、児との関係づくりのモデルとなるアタッチャーとしての役割行動が促進されていた。そして看護者にアタッチャーとしての役割行動がみられると母親が、看護者の児とのやりとりを模倣する行動がみられ、結果として母児相互作用が促進されることが示された。母親との関係性構築においては、母親の気持ちやニーズに応え、母親を情緒的に包み込むような態度で接するアタッチャー（母児の愛着形成支援者）としての役割行動が促進されていた。しかしながら、介入後においても、4 名は、母児との関わりにおいて、対象に合わせたコミュニケーション調整に課題が残った。

リフレクション面接にみる看護者の認知的側面は、次のような変化がみられた。新生児の行動に関する新たな知識やスキルを獲得したことにより、児の行動観察の重要性の気づきが芽生え、乳房管理偏重、看護者主導などのこれまでの自己の母児ケアへの内省がみられた。一方、自己の経験知に裏付けされる実践と今回獲得した新たな知識やスキルとのすり合わせ作業の中で、葛藤を抱いていることも表出された。

【結論】産褥早期の母児ケアに従事している看護職を対象に、「産褥早期母児愛着形成支援」看護職トレーニングプログラムを作成し、17 名の看護者に展開した。その結果、母児ケアの臨床場面において、看護者の児への応答性が高められ、母親との関係性構築において応答的・養育的・模範的態度への行動変容がみられ、看護者のアタッチャー（母児の愛着形成支援者）としての役割行動が促進され、結果として母児の相互作用が促進するという介入効果が検証された。